

私の猫かきない日々

熊井明子



私の猫がいない日々

熊井明子

私の猫がいない日々

一九七七年四月二〇日第一刷発行

著者——熊井明子

発行者——井口孝一

印刷所——大進印刷株式会社

製本所——中村製本株式会社

*

発行所——株式会社白川書院

東京——東京都新宿区左門町三一四 ☎〇三—三五三—三三四

〒一六〇 振替東京九—一七六四五〇

京都——京都市左京区北白川追分町八七 ☎〇七五—七八一—三九八〇

〒六〇六 振替京都九二二

© Akiko, Kumai 1977

私の猫がいない日々

目次

● 31ぴきの猫たちと私の日々

乳母猫・マリと、友猫・ニャン一世〜五世……………9

お鍋のフタを取って、黄味だけ吸って／魚籠の中から仔猫／ニャン私を助けて

総領の甚六猫・新ニャン……………23

猫飼いましょうよ／猫って縁起がいい／ネコはカスガイ

天使猫・ポポ……………37

どんな仔猫を見せて／可愛いさの質がちがう／お母さん猫のお乳はんの少ししか飲まなかったから／ぼくのママかな？／ト・キ・ソの検査済むまで離れてね／猫にはテレパシーが働く／猫は赤ちゃんに害を加えるどころか……／ポポどこが痛い、どこが苦しいの！／ポポ、ありがとう

*

私の猫がない日々……………71

生きものは当分赤ん坊だけにしなさい／ニャンニャンってかわいいよ／なんだ、この猫、道のまん中に坐って／外猫かつてるの／ひもじい猫を捨てておけない

／東京猫地図

愛情深い保護者猫・マイマイ……………91

一年に一度、ノラの恋人に逢ってしまふベルシャ猫／ママ、フワフワじゃないね／ウツの時は仔猫を／毎日外を見はって、あなたの帰りを待ちましたよ／マイマイは生きている！

やんちゃ息子猫・マロン……………117

仔猫ちゃん連れておいで／どの猫にしようかな／こげこげトーストのチョコレート豆つき／目ざまし猫に起されて／電気ねこになっちゃった／コートの裾にシュッ／幸せとは……

●パリ・ロンドン猫日記

パリへ何しに來たの——パリ猫日記——……………143

小路の奥の暗がりを走りぬけていくのは／パリは犬の都？／レオノール・フィニの猫の絵皿／猫より御主人や娘さんは？／美術館で猫に会えますよ／猫の絵を地面にかいてニャーオ／猫友達への手紙／わたしの猫はみにくい猫／文句があるなら云ってみろ／母猫はファンファン、仔猫はティティス

猫がいれば故郷をなくしても幸せ——ロンドン猫日記——……………179

横暴な夫をもつより猫と暮す方がいい／猫がいればふるさとを失っても寂しくない／窓からペルシャ猫が／こんにちは／／ロンドンは猫にやさしいんです

●猫人間の喜びと悲しみ

おれもがんばらなくちゃ——藤原審爾さん……………199

リボンをかけた猫みたいって云われたの——城夏子さん……………202

最後に残った貰い手のない牝猫を飼うの——杉本苑子さん……………205

猫には恋をしたわ——田中澄江さん……………209

猫の形の土鈴ってどこにも無いの——楠トシエさん……………213

猫と別れて国際結婚したら……………クリスティナ・川島さん……………216

何べんでも飼います。猫が好きですから——米川文子さん……………221

エピソード……………225

思いがけないことが次々と起る／猫との別れを乗り越えて／美しいものにひかれる心で結ばれる／終りのない生命を持つて

あとがき 232

カバー画 ヒルダ・ボズウェル

31
びきの猫たちと私の日々

乳母猫・マリと、友猫・ニャン一世〜五世

お鍋のフタを取って、黄味だけ吸って

はじめにどんな風に猫と出会ったかによって、人は猫好きになったり、猫嫌いになったりするらしい。

私の場合、はじめての出会いはい理想的なものだった。まだ赤ん坊の頃、乳母のように年とったおだやかな牝猫が私の所にやって来て、低く喉をならしながら私の傍にうずくまった。その猫はけっして爪をたてたり、牙をむいたりしなかった。既に自分の仔を産み育てる時期は過ぎていたが、まだ母性愛にあふれていて、気まぐれな赤ん坊の私を限りなくやさしく許容し、ごろごろと海鳴りのような子守歌で眠りへと誘った。

この猫マリは、私が三歳になる前に姿を消したので、記憶にはっきり残っているわけではない。だが、私の肌はまだマリのぬくもりを覚えている。私がこれほど猫好きになったのはマリの御蔭だ。マリは私が飼っ

たすべての猫の母だったのである。

私は時々、はじめての猫についてはっきりした記憶が無いことが、たまらなくもどかしくなる。そんな時は、何度も聞いた母の話を聞き直したくなり、ダイヤルを回す。

「もしもし、お母さん、ほら、私が生れた頃いた猫のマリね、赤トラ猫だったことは確かなの？　どんな風にして飼ったの？　その頃のこと、話して」

「何だと思ったら……猫のことかね、皆元気なの？」

東京と松本に離れて住みながら、めったに電話をかけない私は、あわててかいつまんで近況報告をする。
「それで、マリのことだけど……」

「そうそう、マリね。あれは明子が生れて一年目位に、大きな農家を借りて引越した時のことだったわ。どこからともなく大きな茶色っぽい縞の猫が来て、人なつっこく鳴くの。近所の人に聞いてみると、それはこの農家に長年一人暮らしをしたおばあさんが飼ってた猫で、おばあさんが死んだ時、どこかへ行っちゃってたんだった。何しろ、親類中が集って、目ぼしいものは何から何まで、ニワトリまで持ってたけど、誰も猫持ってた人はいなかったの。そこで年とった猫は、世をはかなんで、さびしく放浪していたのでありました」

芝居っ気のある母は、次第にのって来て、琵琶のひき語りみたいに調子をつける。

「ある日ふと、なつかし古巣に来てみれば、若いきれいな奥さんと、旦那さまと赤ちゃんが住んでいるではありませんか。嬉しくなったその猫は、以後ずっと家を離れませんでした、というわけ。知りあいにマリ

ちゃんてかわいらしい子がいたから、マリって名をつけたの。牝猫だったからね。もうおばあさんだから仔猫は生まなかったけど」

「そう。じゃマリは年とった乳母ってところだったのね」

「ええ、いつも明子と一緒だったねえ。いろいろ端では、お守り役みたいにそばに居て、気をつけてくれたみたいよ。当時うちは今で云う核家族だったから」

「それで、私のおかゆの卵、たべたのよね」

「そう。いろいろ端にお鍋を置いたら、マリったら、フタ取って卵の黄味だけ吸って……」

「そして又、フタしといたんでしょ」

「そこまでやったかどうかね。近所の人の話だけど、おばあさんは煮物するたび、おなべのフタをなめさせていたんだって。だからフタをとること、知ってたんだね。でもふだんは大人しい猫で、明子もなついていたようだね。生れつき猫が好きだったんだねえ」

「なぜかしら？」

「さあ……おばあちゃんがタ、マ、ヨで、私がヨ、ネ、コって名前だからじゃない」

「また冗談を……」

マリを飼っていたのは、教員の父が赴任していた村での話である。借家の裏の広い畑に野菜を作ったり、近くの農家で粉や牛乳をゆずって貰ったりして、私たち一家は徐々に食糧難の進む昭和十六年から二十年までを、比較的恵まれて過した。

——母が畑に行っている時など、マリが私を見守っていたのだろう。

私の脳裡には、スヤスヤ眠る赤ん坊のかたわらに、香箱を作って坐る大きな赤トラ猫の姿が浮び上る。チッと鳴いて走るふとった野ネズミや、スルスルと縁を伝うへびを大きな眼で睨みつけ、フーッと威嚇して追いかうマリ。遠慮もなく庭先から入って来るノラ犬の鼻づらを、ポカンとひっぱたくマリ。目ざめて泣く赤ん坊の私にやわらかくふくらんだ体をすりよせ、爪をひっこめた前肢であやすように軽く叩いたり、耳のあたりに冷たい鼻を押しつけてゴロゴロ云うマリ……。

猫への想いがそんな遠い日に始まっていると思うと、猫にふれるたびに私が感じる深い安らぎの秘密が分る。猫が喉をならす音は、生れてこの方、私にとってこよなき子守歌ソングだったのである。

魚籠びくの中から仔猫

マリはいつか姿を消し、しばらくは猫のいない日々が続いた。弟や妹が生れ、家の中は賑やかになった。戦局があわただしくなるにつれ、松本に住む祖父母は、一家が共に住むことを望んだので、私達は松本に引越すことになった。終戦の数ヶ月前で、五十聯隊の置かれた松本は危険だったのだが……。

一家七人が入れる大きい防空壕を父が裏庭に掘り、松本の上空をB 29が飛ぶたび、私たちきょうだいはその中にかい込んだ。猫どころではない日々だった。

やがて戦争が終り、昭和二十二年に私は松本女子師範附属小学校に入学した。クラスには、何人か父親を

戦争で失った子供がいた。母子寮に住むそうした子供の一人が、或る日私に仔猫を見せてくれた。

「しいっ、内緒だぜ、母子寮じゃ、キンシされてるんだ」

それは、猫に与えるエサが無かったからだ。戦争は終っても食糧難は続き、人間の三度の食事さえおぼつかない時だった。

しかし、再び猫のふわふわしたあたたかい体にふれた私は、猫が欲しくてたまらなくなった。

「猫飼って、猫飼って」

それどころじゃないと云われてもめげず、父母に向って私は繰返した。

「おからだって、大豆だって、コーリャンだって、猫は食べるわよ、母子寮のタッチちゃんが云ったもん」

父母はなかなかウンと云わなかった。食物のことはともかく、私たちきょうだい四人のやかましきは相当のものだったから、この上猫などやりきれないと思ったらしい。

「母子寮のタッチちゃんは、お父さんもないし、きょうだいもないのよ。さびしいから猫をかわいがってるんでしょ」

母にそう云われても、私は納得できなかった。祖父母や父母、きょうだいがいる大家族の中にいても、私は猫が欲しかった。むしろ、賑やかな大家族の中にいたからこそ、自分だけの愛の対象が、言葉なく語りあえるものが欲しかったのである。

或る日、父が腰に魚籠いさごを下げて学校から帰った。魚籠は釣った魚など入れるための口もとが一たん細くなつて又開いた形の小型の籠である。魚がとび出ないように、そんな形をしている。

「ワーイ、お魚だ！」

父の釣りのお供をしたことがある私たちきょうだい四人は、魚籠をかこんだ。

「ミュー！」

魚籠の中から細い声がして、私は思わず中を覗きこんだ。

「ハハハ、仔猫だよ、小使いさんから貰って来たんだ」

父が魚籠を横にすると、大人の手の中にすっぽりおさまる位の大きさの白と黒トラのブチの仔猫が、おずおずと這い出して来た。

「わあ、かわいいな！」

「うちで飼うの？」

「逃げてかない？」

「ニャンニャー！」

小学校一年生の私を頭に、一歳の弟までが一斉に口をひらいた。とたんに仔猫は驚いてまん丸な目を見張ってゴソゴソと籠の中に逃げこんでしまった。

「今夜は、紐でテーブルの足につないでおけよ」

父に云われて、私はそっと仔猫をつかまえ、紐で首をゆわえて、居間のどっしりしたテーブルの足につないだ。

「ダメだ、そんなゆるい結び方じゃ」